

る。

【結果】

8 東病棟入院患者148名に検査実施，9名(6.1%)に便からBacillus cereusを検出した。

Bacillus cereus検出患者の入院部屋のトイレ環境培養を実施したが，Bacillus cereusの検出はなかった。

【考察】

8 東入院の患者の便にBacillus cereus保菌はあるが，トイレ環境からBacillus cereusの検出はなく，トイレ環境を介した感染経路は考えにくい。

6. 当科で管理したCOVID-19母体から出生した児のまとめ

小児科

黒川 大輔	内藤 沙苗
酒井 善紀	中島 薫
山本 結子	上杉 裕紀
岡田 怜	加古 優香
栗林 睦子	白井 佳祐
藤澤 開	坂田 千恵
中迫 正祥	福嶋 祥代
神吉 直宙	阪田 美穂
中川 卓	高見 勇一
柄川 剛	五百蔵智明
久呉 真章	

総合周産期母子医療センターである当院はCOVID-19母体を積極的に受け入れており，対応について検討した。

分娩方法は基本的に帝王切開とし，生後は陰圧個室で管理した。ウイルス検査は鼻咽頭ぬぐい液を採取しLAMP法もしくはPCR法を用いた。生直後と生後24時間もしくは48時間の2回にウイルス検査とともに陰性であれば個室隔離解除とした。

実際に2021年4月から9月にCOVID-19母体から出生した児は15名であり，在胎週数と出生体重の中央値は35(25~39)週，2410(737~3337)gであった。帝王切開が14名，経膈分

娩が1名であった。児のウイルス検査は1名が陽性であったが無症状であった。他1名が偽陽性，13名は陰性であった。肺炎や敗血症などの感染症は認めず，全例呼吸補助なしで退院した。多職種にわたる入念な準備をおこなうことで，迅速で適切な対応が可能であった。

7. 臨床所見に先行して自動瞳孔記録計によるNeurological Pupil Index (NPi) が異常をきたした脳出血2症例

麻酔科

岡崎結里子	山岡 正和
南 絵里子	松本 直久
山下 千明	小野 大輔
岡部 大輔	小橋 真司
西村 健吾	石川 慎一
八井田 豊	倉迫 敏明
大森 睦子	

【背景】

Neurological Pupil Index (NPi) は自動瞳孔記録計 (NPi-200[®]) による対光反射の定量的計測に基づき算出される指標であり，神経学的異常の早期かつ客観的な評価が期待される。今回，頭蓋内出血患者においてNPiが臨床所見に先行して異常値を示し，治療方針決定の一助となった2症例を経験した。

【症例】

①50代男性。左被殻出血によりICUに入室した。入室9日目に瞳孔不同が出現したため，頭部CTを撮影した。CTにて脳浮腫とmidline shiftの進行を認め，緊急開頭血腫除去術を施行した。NPiは瞳孔不同が出現する数時間前に左右差を示していた。②50代男性。意識障害を伴う左尾状核出血によりICUに入室した。入室5時間後にNPiが左右ともに0となったため，頭部CTを撮影した。CTにて脳室の軽度拡大と意識・呼吸状態の悪化を認め，緊急内視鏡下血腫除去術を施行した。

【結語】

自動瞳孔記録計によるNPi測定は，頭蓋内病